

平成 20 年 4 月 10 日

東京フォーラム

於：湯島聖堂

中斎塾 東京フォーラム

平成 20 年 第 4 回講話

今日は質問を 2 つ載いております。

小さな時に嘘をついたことがあるし、今でもいけない事(例えば、赤信号を渡ってしまうとか)をついしてしまうので、「嘘をつかなかった方?」と聞かれた時に、堂々と手が挙げられない・・・という質問です。

小さな時についた嘘については、時間の経過と共に忘れることだろうと私は考えます。人間ですから、昔の事が何か疼くような事があると思います。心の傷というのは、誰でもあると思います。しかしだんだん消えてくるものだと思います。自分の心持ちに素直になればよいのだと思います。「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」というように、自分が悪人だという自覚を持っているのだから救われないわけがないと考え始めていくと、“いけない事をしたと強く反省したのだから私は救われる”と思ってもおかしくはないでしょう。

嘘をついたてしまった時に、“この嘘は良い嘘だ”と思えるようなものであれば、結構爽やかな感覚になると思います。いけない嘘をついた、悪いことをしてしまったと引きずるようであれば心の整理ができないし、爽やかなものにはなりません。ですから、すっきり爽やかな感覚が後に残れば、いけない事をしたといったものも醸造されていると思います。後が爽やかかどうか、その一点だと感じます。

では恒例でございますので、お聞きします。

「昨日一日、嘘をついたという自覚をお持ちの方は手を挙げて下さい」

・・・(何人が手が挙がる)

手を挙げた方に伺います。

「爽やかな嘘でしたか? それとも後に引きずってしまうような嘘でしたか?」

寝る時に嘘をついたかどうかを自問自答してみて、爽やかなものであれば一日良かったなと思って良いでしょう。

もう一つの質問は、幹事から戴きました。**言志四録の中に一党一國論があります。私は、現在の政党政治の腐敗を憂えています。一党一國論は危険極まりないと考えますが・・・道が衰えたら速やかに交替すべきと思います・・・**という質問です。私もそう思います。共産主義国は一党独裁ですから、中国をみても、腐敗は凄まじい限りです。おっしゃる通り、道が衰えたら速やかに交替すべきという意見もその通りで、だから日本は明治維新が起きたのだと思います。ですから日本は、これから交替が加速するだろうと思います。

佐藤一斎が「言志録」の中で言われた一党一國論は、その当時は仕方ありません。江戸末期に幕府は、日本の国がすみやかに治まるように朱子学を国学としました。佐藤一斎は校長先生の役割りですから、自分の拠って立つ所を公に批判はしていません。ただ朱子学を掲げるけれども、中身は陽明学ということでも有名な方でしたから、中に入るほどだんだん違うことが出てきたと感じます。

では、本日のテーマに参ります。本日のテーマは、「民は由らしむ可し 之を知らしむ可からず」です。「利によりて行なえば、怨み多し」と混ぜながら申します。

今朝方テレビを見ましたら、福田首相が情けない顔をして映っていました。党首討論では普通、与党の党首は野党の質問に対して泰然自若として答えるという暗黙のルールがあります。多少かみ合わない答えを出しても、何となく許されるのが今までの経緯だったと思います。与党の党首が野党の党首に対して愚痴を言い、質問をするというのは、珍しい形だと思いました。

一國の最高責任者が自信をもって行動する時には、「民は由らしむ可し」であるべきです。

「由らしむ可し」・・・自分の言いたい事・思っている事をきちんと国民に伝えようと思ってもなかなか伝わらない。悲しい、情けないと思いつつ毅然として前に進んでいく。国民はその後姿を見て、“あの人について行こうではないか”と思うことが由らしむ可しです。

「知らしむ可からず」・・・自分の考えている事をきちんと伝えようと思っても、伝えることが出来ない。実に悲しいという気持ちが入っています。それが表情に出るわけです。

一國の総理大臣は、「民は由らしむ可し 之を知らしむ可からず」という気持ちで国民に向かって語りかけるのでなければならぬ。それを誤解している政治家の方々が多すぎます。誤解した説明ばかりを言い過ぎます。「知らしむ可からず」とは、<本当の事を言ったら大変だから、言わないようにしよう>という曲解が世の中に広がっていますので、それは間違いです。そのあたりを党首討論では期待したのですが、なんともレベルが低い

ことかと思いました。

多分この人達は哲学がないのでしょう。目の前の政争で時間を使っているのだという感じがします。目先の欲につられて福田さんは愚痴を言い、小沢さんは政権が取りたいが為に日銀総裁絡みの愚痴をニヤニヤして聞いている。これを見せられる国民の立場は、かなわないと感じました。

翻って一国の総理大臣がそうであれば、世界はどうかと考えるべきです。そうすると、聖火リレーも実に情けないと感じます。更に自分が所属している組織を考えて、トップはどうだろうか？ 家庭を考えて、父親の立場・母親の立場はどうだろうか？ そうすると子供が親を殺し、親が子供を殺す事件が非常に増えています。やはり日本の国の籠が緩んでいる。ならばせめて自分自身はどうでしょうか、ここまで頭が回っていけば良いと思います。こう考える良いきっかけに、今の世情は、なっていると考えます。

では「六中観」の話をさせて戴きます。

忙中閑有り・・・忙しい時ほど暇を作りましょう。忙しい忙しいで動いていると、心が磨り減ってしまいます。これは年代によって変わると思います。私自身の体験の中での六中観を申します。私の忙しい時期は、会社を作りたての頃です。24歳で結婚をしましたから、それから28、29歳くらいの時は、かなり無茶苦茶な時間でした。大晦日はいつも仕事をしていましたので、現場の中で除夜の鐘を聞いていました。警備会社ですから、朝5時か6時くらいにはガードマンを連れて現場に入りました。高速道路の工事現場で交通誘導をしていました。

顔中真っ黒になりながら夕方5時6時くらいまで仕事をします。その後、アルバイトの従業員たちを自宅に送り返して、翌日仕事をしてくれる人探しをします。現場の近くにあった大学の寮に行って、授業の空いている学生を探すのです。自宅に帰ると深夜2時か3時です。そういう生活を1年ちょっと致しました。その繰り返しで、会社を作りたての頃は無茶苦茶・滅茶苦茶でした。

「忙」の時は滅茶苦茶です。自分の人生はおろか、会社・家族含めて大変な毎日を過ごすものだと思います。「閑」とは、その中で何とか時間を作って自分を取り戻す。もの凄く忙しい時には、かえって清忙（清々しい忙しさ）という時間が取れる。忙しくてどうにもならない時期が、どなたもあると思います。その時に爽やかな忙しさをお考え戴くと、「閑」が生まれると思います。意識的に「閑」を作る時には、香を焚くと良いと思います。煙がたゆたっている間は、自分の心を穏やかに落ち着けようと思う気持ちが「閑」を生んでくれます。

苦中楽有り・・・「中」という文字は、相反するものの考え方、お互いに敵対しあっているもの、それらが融合して上のレベルに上がっていくという意味を持っています。中庸・中道・中有といった東洋の哲学の根幹にあるものは、皆「中」という文字です。苦中楽有りとは、苦しみの中に楽しみが見つかるということです。苦しい苦しいと思う、その中に本物の楽しみがあると信ずる心が必要です。苦味の中に甘さが感じられる。本当の甘さは苦味の中から生まれるとお考え戴くとよろしいでしょう。

「苦」という事で申しますと、私が会社を作りたての頃は、あまり苦痛には感じませんでした。しかし人様から聞くと、「苦」という部分はやはり資金繰りでしょう。

お金に関して、ルールが結果として出来たものを申します。

まず、給料の遅配は33年間致しませんでした。借りたお金は必ず返しました。連帯保証人になった方にはそれなりの事をしてきました。事件・事故が起きた時には、必ず金銭的な責任も取ります。おかしなお金は受け取りませんでした。相手の足元を見て吹っ掛けたり、値切ったりはしませんでした。・・・こういう事がルールとして心に残っています。

具体的に申しますと、給料の遅配をしないという事はとても大変です。お客様から代金を戴くのは、仕事が済んで2ヶ月先です。最初は、仕事をすればするほどお金が足りませんでした。後で気が付いたのですが、次々に良い人に巡り会えました。信用保証協会のある担当者と親しくなって、色々な所を紹介して戴きました。又、国民金融公庫の担当者の方とも親しくなって、アドバイスを沢山頂戴し、結果としてお金を貸して戴きました。そうやって毎月毎月、公的資金を借り歩きました。2年くらい経ったところで、自分で資金繰りをするのをバトンタッチし、それ以降は自分でお金を借りまくるという事はしませんでした。私はお金を借りるたびに人間関係が深まりました。相手の方と非常に親しくなって、現在もお付き合いしています。ですからお金を借りるという事は、人様と知り合うチャンスだったと思っています。

資金繰りに関しては全部、情です。理屈は頭の中において、人間が動くのは情でしか動かない。策略で情を使おうとしても無理です。全部本音で情に訴えると、どういうわけだか資金繰りがずっと出来てきました。お金のやりくり算段は、人の情けが身に染みます。理屈ではないことは、身体の中に染み込んでいます。ですから資金繰りをする時には、お金の重みを身体で感じる・情けを感じるような動き方をすると、多分上手くいくのではないかと思います。

死中活有り・・・よく「死ぬ気でやれ」と言います。私は死ぬ気にはなったことがあります

ません。しかし揉め事でギリギリの相対で話をする時に、“左腕一本相手にくれてやる”と腹をくくって相手先に行ったことがあります。命懸けのギリギリの揉め事を収める時には、どこも犠牲なしでやる事は難しいと感じます。命懸けのことを何回体験するか、どれだけ修羅場をくぐるかによって、動きが変わってきます。

死中活有りとは、そういう腹を持つかどうかです。尚且つ一回死んでしまったら、仮死状態になったなら、これは大きいです。仮死状態から蘇ると、非常に気持ちが良いのです。会社も“これで倒産だ”と思ってから、もう一度復活する事ができれば素晴らしい。会社で見ますと、社長は相手の生き死にを握ります。首を切る場合は、命を奪うのに等しくなります。

私は人さまの首を切ったことが、30年間に5つほどありました。会社の研修で、女性と同じ部屋で一晩過ごした責任者。会社のお金に手をつけた人間。会社からお金を借りて返さない人間。会社に在籍していて、別の会社を作ってしまった人間。重要な人事を漏らした人間。解雇権は乱用しませんが、こういう事も全部、哲学・判断基準があったからだと思います。私の判断基準の奥深い所にあるのは母親の存在で、母親が喜ぶことをしたいという思いが、常にありました。母親の存在があって、母からの<素直であれ>という教えがあって、それから哲学・判断基準が生まれてくるという流れだったと思います。

壺中天有り・・・色々な本を見ると、壺中天有りの出典については、『漢書』の「方術伝」にあると書いてあったり、『後漢書』の「方術伝」にあると書いてあったりします。或る小説家の書いているものには、『漢書』とあります。孫引きをしていると恐いので、今回、出典を調べてもらいました。そうしましたら、『後漢書』の「方術伝」に費長房の話が出ていました。

安岡正篤先生がこの話を引き合いに出したのは、自分自身がほっとする所、自分を磨く所、自分が向上する所、そういう空間・場所を作りなさいという事です。つまり自分自身が向上できる別天地を持つという解釈をします。

ところが元になっている話しは、こういう内容でした。

費長房は市場の役人です。市場の中で薬を売っているお店があって、店の前には壺が置いてあります。費長房が何気なく見ていたら、老人がその壺の中にピョンと入ったのです。それを周りの人に言っても、誰にも見えない。

誰にも見えないのなら、あの老人は仙人に違いない。費長房も仙人になりたいと思って、老人の所に行って「あなたは今、壺の中に飛び込みましたね。さだめしあなたは名のある仙人でしょう。私を弟子にして下さい」と頼みました。「私の姿が見えたのか。お前はな

かなか見所がある。では、明日訪ねておいで・・・」翌日、費長房は老人の所に行って、一緒に壺の中に入れて貰いました。そこは別天地で素晴らしいところでした。

費長房は仙人に弟子にしてくれるよう頼みます。仙人は「お前に三つの試練を与える。それに合格すればお前を弟子にしてやる。」と言います。仙人は費長房の身代わりに青竹をぶら下げました。それが周りの人には費長房が首を吊って死んだように見えるわけです。家族は、泣く泣く青竹を埋葬しました。

費長房は仙人に付いて修業を始めます。虎が群がっている中に放置されますが、費長房は動揺しませんでした。次の修業は、大きな石を腐った縄で吊るしてある真下に寝かされ、巨石が落下する恐怖に耐える修業を受けさせられます。しかし費長房は平然として寝ています。三番目の修業は、大きな肥溜めに放り込まれました。費長房は我慢していますが、目の前にもの凄い異臭を放つ虫が入ってきて、思わず「おえっ」となったところ、不合格になってしまいます。

仙人は費長房に「お前は不合格だけれども、お守りを授けよう。このお守りで、お前は人界に帰って世の中の為になる事をしなさい」と言いました。仙人のくれた竹の杖にまたがった瞬間に、たちまち家の前にいました。仙人に言われた通り、その杖を河に放り込むと、それが籠になって天高く上っていきました。

その後、仙人から貰った御守札の力で、費長房は世の為・人の為に尽くしました。しかし最後にはその御守札をなくして、鬼たちに殺されてしまいましたとさ・・・。という話です。

最後に「鬼」が出てきますが、中国では「鬼」は先祖ですから、人間と異なるものです。論語の中では、孔子はそういうものについては分からないと書いてあります。

なぜ安岡先生は「鬼」の話を出したのか、もう一度調べようと思っています。わざわざその「壺」を出して、その中に「天有り」としたのですから、知らないわけがありません。安岡先生は「壺」を素晴らしい別天地だけで考えずに、自分自身にそういう試練を課せると私は考えています。自分を人糞の中に放り込んだらどうなるか、自分が横になって目の前に大きな石がぶら下がったらどうなるか、虎の中に放り込まれたらどうなるか・・・という事を考えると、この「壺」とは相当意味深なものがあると思います。ですからこれはもう少し砕いて、後日説明しなければいけないと思っています。

意中人有り・・・本当に自分が困った時に、相談できる相手がいるかどうかとお考え下さい。困った時に誰かの顔が浮かべば良いのです。例えば人から裁判で訴えられた時、或いは自分が裁判を起こした時に、心から相談できる人がいて欲しいと思うし、又、人であ

ればそういう人がいるのが当たり前ではないかと思えます。もしそういう人がいなければ、不徳の致す所と言ってもよいでしょう。

腹中書有り・・・自分自身に人生哲学があるかどうか。私は人生哲学は「知足」です。そして「利によりて行なえば、怨み多し」です。この二つをしっかりと腹に収めましたので、毎日が爽やかな充実した人生を過ごすことができていると思っています。

以上で本日の東京フォーラムを終了させて戴きます。
有難うございました。